
緋弾のARIA 転校生は謎の武偵

キッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のARIA 転校生は謎の武偵

【Nコード】

N8115X

【作者名】

キッド

【あらすじ】

戦乙女によって緋弾のARIAに転生させられた主人公
そこでARIA達と原作をぶち壊す

転生という名のプロローグ（前書き）

再び書くつもりです

訂正

転生というなのプロローグ

此処は・・・どこだ

『やあやあ』

誰だ？この女

『私は神様だあゝ』

精神科、精神科、合った番号は

□ -

○

つと

『頭がおかしい訳じゃない！』

嘘だつつつつ！！

『古いぞ』

ひぐらしをバカにするな！

それより此処はどこだ？

『いい加減喋りなよ

此処はあの世』

「ふざけるとシバくよ（怒）」

『ごめんなさいごめんなさいでも本当なんですうゝ』

ちっ

「なんで此処にいるんだ？」

『私の事故であなたを殺しちゃったから』

「目を瞑って歯を食いしばれ」

『だから転生させてあげるの』

「だから此処にいんのか

転生？」

『うん、この中から選んで』

緋弾のエリア

ガンダムSEED

ドラゴンボール

「死亡フラグ立ちまくりじゃん!!」

「しょうがないじゃん私戦乙女なんだから」

「俺を殺す気か!!」

「緋弾のアリアに決定」

「勝手に決めんな!」

「他のは今取られたよ」

リアルタイム!?

「さあ願いをいえ」

狙撃科Sランク

全ての銃を使いこなせる
アリア達と常に行動する
身体能力を高くする

「わかったといってこーい」

第巻話 出会い（前書き）

やばい所あれば指摘お願いします
クレームは受けないよ

訂正

第巻話 出会い

よし状況を整理しよう

此処は武偵校の男子寮のようだ

俺が部屋を見渡すと壁に制服が引つ掛けてあった

「お、ご丁寧に武器があるな・・・・・・・・この武器・・・
・・・どつかでみたような」

「クソ神聞こえるか？」

俺は神を呼ぶ

「呼んだ？」

「この武器はなんだ？」

「私の好きな武器」

ハア

「お前は双魔銃ベルセルクとGX―5
死ヲ刻ム影が好きなのか？」

「てかDG―Xと死ヲ刻ム影はG・Uの武器だろ・・・・・・・・」

「正解」

ちなみにDG―Xは粒子ブレードも使えるから
じゃよろしくね」

ふあゝいと」

ちっ

「あのダメ神何考えてんだよ！」

「（とりあえず学校に行くか）」ドゴーン

俺が武偵高に向かう途中爆発音が聞こえた

「（タイミングからしてアリアとキンジだろ
原作よりセグウェイの数多くね？）」

「危ない！！」「アリアが撃たれるよりはいいさ」

アリアとキンジの声がよく響く

「（まあいいか）」

助太刀しようか？」

俺が出てきた時、15台あったセグウェイの内8台がこっちを向いて撃ってきた

「双魔銃ベルセルクよ、われもとむだんがん我求弾丸を装填せよ、
超電磁砲発射」

流石ベルセルク凄い威力だな

えっ、装填の台詞？ノリで言っただけ、本当はいらない

向こうも終わったのかこっちにくる

「はじめまして・・・かな？ヒステリアの力を持つ少年遠山キンジ
そしてH家の娘神崎・H・アリア」

キンジ side

「助太刀しようか？」

1人の男子が茂みからだと8台のセグウェイがそっちをむく

「レールガン超電磁砲発射」

たった一発で全てを粉碎した

俺も倒し終わると男子の方に向かった

「はじめまして・・・かな？」

ヒステリアの力を持つ少年遠山キンジ

そしてH家の娘神崎・H・アリア」

何故その事を知っている！？

主人公 side

「お前らの名前知っていて、俺の名前を知らないじゃアンフェアだな
俺の名前は加藤 ヒロキだ」

これが神に転生させられた加藤 ヒロキとアリア達との出会いだっ
た

第巻・伍話 キャラ設定（前書き）

訂正

第弐話 吉か凶かと聞かれたら凶（前書き）

訂正

第貳話 吉か凶かと聞かれたら凶

アリアとキンジにあつていざ教室へ！

『もし、神、聞こえるか？』

『聞こえるよ』

『俺って転校生？』

『前からいることになってるよ、クラスは2 - Aね』

2 - Aか、あいつ等と一緒にか

『ちなみに超能力使えるから

能力は砂塵。砂があればほぼ無敵かもね

あと、陸奥圓明流も使えるようにいじったから』

いつの間に！

あ、途切れた

2 - A

ここか

とりあえず席につく

「先生、私あいつの隣がいい」

「ぶーっ」

「どうした！？」

「なんでもない、気にするな」

きつたねえな

「先生俺転校生と席変わります」

お、右にアリア、左に理子

これは

からかいチャンス

「良かったな遠山キンジ、両手に花じゃないか」「な、うるせえ」

「はい、あんたのベルト」「わかった、これフラグバッキバキにたつてるよ」

まあな

バーン

チッ

「恋愛なんてくだらない、そんな事言ってる奴には風穴開けるわよ」

「——オイ」

バババツ

全員がこつちをみた

「いてえな弾かすったなあ」

頬からは血が流れていた

ペロツ

「お前二風穴アケてやるう力？」

「ヒロキ落ち着け！！」

ちっ、武藤に救われたな

「威嚇発砲するときは人の位置を確認してからやれ」

昼休み

俺は理解棟の屋上にいる

昼飯はウィーダーinゼリー

「そつえば朝ねアリアがキンジの事探ってたよ」

「あたしにはヒロキについて聞かれたよ」

俺もかよ、キンジだけで十分だろ

「てきとーにキンジのは『昔は強襲科で凄かったんだけどねー』っ

て答えて

ヒロキのは『レキみたいにロボットだよ』って答えた」

俺ロボットかよ！

頭痛くなってきた、帰る

放課後

「ん？何だこれ？

デザートイーグルにドラグノフ狙撃銃？」

手紙だなになに

『チャオつす「いきなり他の漫画のネタ使うなあー！」いきなり怒鳴らないでよね「怒鳴らせてんのは誰だよ」それより、その二つはプレゼント、あと空き部屋にメンテナンス道具あるから、出来るだけ、D G | Xと死ヲ刻ム影、ベルセルクは使わないでね、非常時以外は』

きわめて了解

ピンポーン。チャイムが、このタイミングでこの押し方はアリアか、隣はキンジの部屋か

ピンポンピンポーン

ピポピポピポピポピポピポピピンポーン！ピポピポピンポーン！

確かにこれはウザい

そろそろ出るし、アリアの奴隷になれ宣言聞けるかな？

ベランダに侵入すれば大丈夫だな

「そうと決まれば侵入開始」

思いのほか楽だった

「——キンジ。あんた、あたしの奴隷になりなさい！」

キター（　　）

アリアの生奴隷宣言

「あ！お前！」

やべー見つけた

「三十八計逃げるにしかず」

多分こつちに来んな

とりあえずコンビニまでダッシュ

そろそろ、キタキタ♪

「遠山夫妻仲良く買いい物かな？」

「夫妻じゃねえ！」

「お前は用が済んだのか？」

「晩飯とかだ」

中身、ウィーダーinゼリーグレープ味×8

「大丈夫なのか、それで」

「現に生きている」

「あんた、女子の言ったとおりロボットみたいね、時々人間らしくなるけど」

「関係ない」

俺は帰る。そうだ、遠山キンジ、神崎・H・アリアと組め、そうすれば、お前の欲した^{ほう}真実がわかる。」

「待て！」

「まだ何か？」

「お前は何者だ！？」

「選択肢をやるう」

「選択肢？」

「1・神崎かなえをスケープゴートにしたイ・ウーのメンバー
「なっ！！」

「2・ただの狙撃科のSランク武偵」

「え、Sランク！？」

「3・死を知ったもの、言い換えれば死を体感した者」

「あんたどれが本当？」

「それを言っでは意味がない

もし1だと言ったら？」

「あんたを逮捕して、ママの無罪を証明させてやる！！」

「それで、懲役864年から懲役742年に減らすか？」

「あんたどこまで」

バラすか

「バラしてやるよ、1はハズレだ、良かったな、オルメス」

「本当に何者！！」

「答えは、消去法で行けば3、だな？」

「遠山キンジ君正解

俺は死を体感した者。少しなら未来も分かる

だが、教えたりしない

最後に1つ、そこにはお前らの家族がいるかもな
話は終わりだ、じゃあな」

部屋

言い過ぎたかな？

少しメンテして寝よ

「神が原因だなやり方が分かる」

「いくら狙撃科だから壁に寄りかかって寝るとかむー」

寝れたわwww

第参話 強襲科へアサルト (前書き)

やっちまったか？感はある
だが後悔はしないZ E！！
クレームは受け付けない！
訂正

第参話 強襲科へアサルト

さて、確か今日はキンジとアリアが猫探しをするんだっとな
お前は行かないのかって？

ふっ、理由は簡単・・・それは俺が猫アレルギー DAKARAだ！
にしても、隣——キンジ達が五月蠅い

「この・・・疫病神・・・め！」

「熱いね、遠山夫妻、夜道に気をつけな」

放課後、狙撃科棟から見ていた。神曰く俺の視力は両方とも7・0
だそうだ。

レキより見える

どうりで見えすぎる筈だ

まあ俺がウィーダー飲んでる（食ってる？）隣でレキがカロリーメ
イトを食ってた

「レキ、それがお前の主食か？」

「はい

ウィーダーだけのアナタと似てます」

知られてた！？

「食うか？」

俺はカバンからもう一つ出してレキに渡した

「ありがとうございます。どうぞ」

レキはカロリーメイトをくれた

お互い貰ったもの食いながら

「レキ、別に敬語じゃなくて良いぞ」

「？」

わかってないって顔だな

ナデナデ

「何ですか？」

「ワリワリつい、お前が可愛くてそれに、何？で良いんだよ」

「わかった／＼」

顔が少し赤い。風邪か？

「カロリーメイトうまいな。今度買お」

「私も買ってみる」

その後てきとーに解散になった。

レキと帰ったけど

だいぶ親しくなった

「（原作より口数増えたな）」

【お前が原因だ】

変な電波キャッチした

翌日

今日は強襲科に行く日だな

俺も行こ

「ん、遠山キンジか」

「お、ヒロキか」

「どうした？」

まるで——峰理子に神崎・H・アリアの情報を頼んでその後台場で買った1980円の腕時計を壊されて、壊れたお前の腕時計を胸にしまわれてすっかり峰理子の金色のブラがみえてしまった——みたいな顔だぞ」

「どっかで見えてたろ！！」

ヤバイ楽しい

にしても俺よく覚えてるよな原作

「じゃあな

嫁によろしく」

「おまえなあー！」

来たぜ強襲科！
アサルト

「キンジは……いたいた♪」

「あ！おまえは！強襲科Aランクのヒロキ！転科してくれんのか！？」

いきなり三上に話かけられた

『おい神よ』

『なに？』

『何故強襲科Aランクなんだ？』

『それはお詫び。』

狙撃科以外はAランクだよ『

マジかよ

「あんた、Aランクってどうゆうこと。」

「知らん」

「私は認めない。

勝負よ！！」

「拒否権は？」

「無いわよ！」

やっぱり？

「どこでやんだ？」

「あそこよ」

アリアが指差したのは、小さくもなくデカくもない透明な箱

「ルールはお前が戦闘不能になったら俺の勝ち。

俺を一回でも地面に倒したらお前の勝ち」

「面白いこと言っなあじゃあ始め！」

強襲科担任蘭豹の合図で始める

ズバババン

ガバメントを乱射してくる

「あたらねえよ」

パン

DEを発射する

「きゃっ」命中

だが決定打にはならない

陸奥圓明流を見せてやる

「銃をしまつてどうゆうつもり!？」

「しっかり見てろよ

陸奥圓明流・・・無空波」

「なんのつもり!？」

その程度じゃ倒せないわよ!」

「フィニッシュを入れないだけありがたく思えよ。

もつて3秒

2・・・・・・・・・・・・・・・・1・・・・・・・・・・・・・・・・0」

ボタン

「あれ?身体が動かない」

「そりゃ無空波喰らったからね

力はセーブしたから2、3分で起きれるだろ。

俺の勝ちな」

「本当に何者!？」

「武偵なら自分で調べな」

「わかった。調べてやろうじゃない」

「じゃ、さて、ゲーセンでもよるか」

ゲーセン

さて、そろそろ帰るか

「・・・・・・・・」

はあ

なんであいつ等に会わなきゃなんねえんだよ
そう頼んだの俺だけどさ

「白雪に報告しとくか」

「それは止める！」

同感

あんなバーサーカーに会いたくないし

さて、明日はバスジャックの日だどうすつか

バスジャック（前書き）

原作がまるでゴミのようだ！

すみませんちょーし乗りましたm（
――
）m

バスジャック

今日はバスジャックが起こる日なので
早めに登校しました。 イエイ（ε）
おえ。自分でやって気持ち悪くなった。慣れないことはしない方が
いいな

「時間は——ちょうどいいな」

「あ、ちょうどいい所に——」

「バスジャックでも起こったか？」

「事件が——って知ってるなら話は早いわね。
行くわよ」

ほい屋上

「お、レキ、はよ」

「おはよう」

「レキがタメ口なんて。あんたなんかしたの？」
「別に」

「————すぐといったらすぐ来なさいッ！」

C 装備とは S A T みたいな装備だ。S A T がわからなければ踊る大
調査（レインボーブリッジを封鎖せよ）を見よう

俺とレキは防弾制服。

キンジとアリアは C 装備

「来たわね」

「レキ、ヒロキ」

「……」

無言でキンジに向く

「おまえ等もアリアに呼ばれたのか？」

「はい」

「右に同じ」

「そのヘッドホン。いつもなんの「音楽じゃなく、風の音だと。」

そうなのか？」

「（コクン）」

頷く姿が少し可愛いと思ったのは秘密だ

「時間切れね」

「Sランクがこんなにいれば良いわよね」

「所で何が起こったんだ？」

「バスジャックよ」

「神崎・H・アリアと遠山キンジがフロント
俺とレキがバックアップする。

いいな」

「あんた勝手に――」

「どうせ同じだろ
行くぞ」

へり内

「あんたについて調べたわ」

あの後調べたんだ

「加藤ヒロキ

加藤清正の子孫

この位しか出なかったわ」

「ふゝん。

ちなみに俺も欠陥品だ」

「へ？それって」

「見えたあのバスだな」

「え？見えないじゃない」

「今ホテルの前を右折したバスです」

「加速してるぞ」

「よ、よく見えるわねあんたら視力いくつよ」

「左右ともに6・0です」

「左右ともに7・0だ」

俺とレキの視力に2人共あ然としていた

そんな中へりはバスに近づいている

「空中からバスの屋上に移るわよ。あたしはバスの外側をチェックする。キンジは車内で状況を確認、連絡して。レキとヒロキはヘリでバスを追跡しながら待機」

「内側つて中に犯人がいたら人質が危ないぞ」

「武偵殺しなら中には入らないわ」

火薬の匂い

「そもそも——」

「火薬の匂いがする、多分爆弾だろ」

「武偵殺しかよ」

「行くわよ」

独唱曲扱いなのがわかるね

あれはルノー！嫌な予感がするぜ

『潜り込んで解体を試み——あっ』

ルノーがタックルしたか

「神崎・H・アリア、狙撃する」

『当てないようにね』

「了解」

やっぱりレキみたいなセリフ欲しいよな〜まずはてきとーに

「——我、銃弾を放つ者なり——」

『ヒロキ？』

キンジのどうした感の声が聞こえるが無視

「——その銃弾に心は無き——」

レキは詩のような言葉だが関係ない

「——ただ、ターゲットに向かいて放たれるのみ——」

パパパン

銃弾を三発撃つ

一発はUZEに残り二発はルノーのタイヤに当て、ガードレールに

ぶつかり、爆発した

「遠山キンジ、ケガ人はいるか!？」

『大丈夫だとりあえず爆弾を解体する』

「了解」

「ヒロキもう一台くる」

なに!？

またかよ

「我、銃弾を放つ者なり——」

再び唱える

「その銃弾に心は無き——」

ただ、ターゲットに向かいて放たれるのみ——」

パパァン

次は二発

『キンジ危ない!!』

アリア side

あたしはもう一台のルノーに気づいたがそのときにはもう銃弾がキンジに向かって放たれてた

「キンジ危ない!!」そう叫んでキンジを庇う

——死ぬ——

そう思ったけど何時までたっても衝撃は来なかった

「アリアどうした？」

ばかキンジのマヌケ声が聞こえる

『ギリギリだな』

インカムからヒロキの声が聞こえた

まさか、銃弾を弾いたの!？あの距離から

やはりただ者じゃないわね

ヒロキside

まあこんなもんかね

『ヒロキ！レキ！あぶねえ！！』

キンジ？

グラッ

「な、なんだ！？」

まさか狙撃された！？

ヤバイ！！今の衝撃でレキがヘリから落ちた

「レキイイイ！！」

ガシィ

落下するレキを抱きしめ俺達は頭から落下した

「レキ……だい……じょ……うぶ……か？」

「私は大丈夫

でも——」

「俺は……気にすんな……こんぐらい……平気だ」

「ヒロキ！レキ！無事か！？」

キンジの声が響く

「ヒロキ！！」

「おう」

「おう……じゃねえ！！頭から血出てるぞ！！」

「こんぐらいなんともねえよ

それより爆弾は？」

「解除したわ」

「そう……か、少し……寝るわ」

「——！！——！！」

レキが何か叫んでる

珍しいなレキが叫ぶなんて

そして意識を手放した

ここは、どこだ？

見慣れない天井

病院か

とりあえず起きるか・・・

「痛っ」

身体中が痛^{いて}え

「すうーすうー」

寝息？

周りをみるとレキがベッドの隣で寝ていた
なんで？

ガラッ

「あ、起きたわね」

「ノック位しろ」

「別に良いじゃないどうせ返事しないし」

「もし着替えてたらどうする」

やれやれいきなり夫婦漫才しなくても良いだろうに

「「夫婦じゃない（じゃねえ）！！」」

「綺麗にハモられてもなあ」

「レキはあんたが目覚めるまでずっといたのよ」
へ？

「俺どんぐらい寝てた？」

「3日間」

3日!?

「あ、ヒロキ、起きた。良かった」

「レキ悪いな心配させて」

「大丈夫」

「で、神崎・H・アリア。通常遠山キンジの評価は？」

「おまつ」

「通常？」

ヒロキ、詳しく教えなさい」

「評価は？」

「残念だったわ」

「俺から言い出してなんだが」

遠山キンジの評価を付けるのはまだ早いぜ」

「へ？」

「パーティを組むのは一件だけって言ったよな」

「ええ」

「ならまだ終わってねえ《・・・・・・・・・・》」

武偵殺しはまだ終わらねえ」

第伍話 招かれざる客（前書き）

あんま進まへん

第五話 招かれざる客

やっと退院できました」

『神やーい』

『なんじゃらほい』

『俺の超能力は砂塵だったよな、超能力は頼んでなかったぞ』

『それは、私の気まぐれだあー』

気まぐれで超能力にすんなや

『じゃあ、砂を入れる入れ物が欲しい、でかい奴』

『NARUTOの我〇羅みたいになるけど』

『NARUTOの我愛〇みたいなので良いから。あ、これは便利だな、砂塵』

『寮の部屋に送っておくよ』

『サンキュー』

さて、帰るか

「加藤ヒロキ君だね」

「誰だ!？」

「教授とでも名乗っておこう」

教授、たしかイ・ウーのボス

「で、イ・ウーのお偉いさんが何の用事かな？」

ただの武偵に「君はただの武偵ではないね、いきなり君のオーラ、強さが上がった」

「初代シャーロック・ホームズに評価して頂けるとは光栄だね」

「君はなかなかの切れ者だね、どうだい？イ・ウーに来ないかい？」

まじかよ、スカウト？

「断ったら？」

「気絶させて連れて行くよ」

拒否権ねーじゃん

流石アリアの先祖

「では、いくよ」

「ちっ」

足場は……土！試す時が来た

「クラウドショット」

「君の能力は業名からして、砂塵か」
もうばれた。

当たり前か

「隙あり」

鉄製のステッキで突いてきた

「クラウドウォール」

「おっと、危ない」

一瞬でバックステップしてよけた

流石だな

「これはどうだ！砂波！」

「ふむ、良いけど甘い」

シャーロックは、鉄製のステッキを砂波に向かって縦に振ったすると砂波が左右に割れた

「なんだと！！」

ドコオツ

「ぐはっ

ステッキに仕込んである刀は使わなくて十分ってか？」

「君は詳しいねそれは推理かい？」

「教えねえよ」

俺はデザートイーグルを放ったが普通に弾かれた

「陸奥圓明流……無空波！」

「ふむ、面白い技だぜひい・うーで教えてくれないかな？」

「他人に技は教えない主義でね！」

バキィ

シャーロックのステッキで殴られ吹っ飛んだ

「ぐはあつ

ハア・・・ハア・・・勝てねえなこりゃ」

「わかった所で素直にイ・ウーに来て頂きたい。くっ！
なんだ！？」

やつと無空波が効いたか

「勝てないなら

逃げる！

あばよ、縁があればまた会おうぜ！」

キンジの部屋

ピンポン

「はい」

「よう、遠山キンジ、とりあえずいいか？」

「いいが、ヒロキ、どうしたんだその傷！」

「神崎・H・アリアはいるか？」

「キンジ、どうし——ヒロキ！どうしたの！？」

「キンジ、少し外してくれるか？」

「わかった」

行ったか

「神崎・H・アリア、俺はイ・ウーにやられた」

「イ・ウーですって！」

「ああ、スカウトされたよ」

「ボロボロって事は断ったのね」

「ああ、相手は初代シャーロック・ホームズだ」

「曾お爺様！？嘘よ！曾お爺様はもう死んだはず！」

まあ信用性は無いよな

「別に信じなくて良い、ただ、奴らは強い、気をつける
それだけじゃあな」

とある場所

「加藤ヒロキ君、僕に一撃入れたのだから面白い、是非とも欲しい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115x/>

緋弾のアリア 転校生は謎の武偵

2012年1月4日15時49分発行